

## 夏の轍

菊野 啓

カーテンから差し込む早朝の陽光を、目を閉じたままの額に感じながら、タカシはガタのきた木製のシングルベッドを軋ませて跳ね起きた。夜明けからもう十五分もたっているだろうか、目覚めの早い太陽はきりきりと自分だけの仕事を始めている。タカシは壁のハンガーに吊り下げてあった皮のライディングジャケットに大急ぎで体を放り込み、流しの上に置いてあったヘルメットとグローブをつかんでマンションを飛び出した。

駐輪場の隅に自転車とともに置かれた愛車のカバーを外す。情熱的な赤が目の前に現れた。ドウカテイ900SS、タカシが生活費以外のすべてを投入して手に入れたイタリア製のバイクだ。慎重に車体を引っ張り出し、もどかしくキーを回す。チョークを引いてセルボタンを押すと、大きなシリンドラーを二つ持つ空冷のエンジンは苦しげに咳き込んだ後、テルミニョーニのマフラーからドンドンと吼えるような鼓動を撒き散らしはじめた。マンションの住人の目を覚まさせないかと、やや気を遣いながら暖機運転もそこそこヘルメットを被ってガクガクと走り出した。調子が出るまでもう少しの我慢だ。

海沿いの道をゆっくりと流し、タカシは機械と自分の体の準備ができあがるのを待つ。調子は悪くないが、歯を磨いてくるのを忘れてた。コトミの前では口臭に気を付けることになるだろう。まだ低速では引っかかるエンジンにスロットルを合わせながら、傍らに広がる海を眺めた。水平線が真っ青な空と海を鏡のように隔てている。すうっと大きく深呼吸すると、肺胞が涼やかな潮風を吸って膨らむ。ドウカテイのキャブレターも同じ空気を吸って、いくぶんノイズを潜めたエンジンが早くアクセルを開けてくれと急かし始めている。気持ちよきゅっと引き締めてスカイラインに乗り入れる。県下でも有数の観光地である鳴門公園へと海を見下ろしながら空中を縫って走る道は、愛車の性能を試すのにはうってつけだ。この時間にはまだ観光客の姿もない。ホテルのベッドの中で寝息をたてている頃だ。

タカシはバイクの挙動に異常がないかひとつひとつ確かめながら、徐々にスロットルを開けていく。跳ね上げたマフラーから乾いた排気音が背後に撒き散らされ、脊髄に伝わるリズムカルな振動が

血管の中にアドレナリンの放出を呼ぶ。路面の隅々まで知り尽くしたコーナーをいくつかクリアすると、なんともいえない高揚感に包まれるのだった。

これよ、これ、とタカシはシルドの下で目を輝かせる。なんにも縛られない自由、背中にドラゴンの羽の生えたような身軽さを感じている。

一年前はじめて鳴門に来た時には、慣れない仕事を覚えるのに一杯だった。神戸の繁華街で学生時代を送ったタカシは、コンビニもゲームセンターも近くに寂しい生活に押しつぶされそうだった。ワンルームマンションの窓から眼下に広がる広大な海のざわめきは、夜中に得体の知れない怪物が自分を暗い水の中へと引きずり込んでいく夢を見させた。

すべてが様変わりしたのはバイクを手に入れてからだった。イタリアンレッドのドウカテイ900SS、ほぼ新車に近い状態の出物を近くのバイク屋で見つけた時には、運命的な出会いを感じたものだ。文無しに近い状態だったが迷わず買うと決めた。やすやすとラインが組めたのはタカシが勤めるリゾートホテルの信用力のおかげだった。このスカイラインの中腹にある大きなホテルは、どこまでも上がり続ける地価と株にまやかされた幻の経済発展の象徴だった。ホテルの従業員は、出来たばかりの本州連絡橋を利用して神戸大阪あたりから急遽かき集められた。幸運かどうか神戸でぶらついていたタカシにもそのお鉢が回ってきた。ことのほか喜んだのは学校の先生をしていた両親だった。厄介払いの気持ちも強かったのかもしれない。親のスネをかじって入った三流大学での学生生活の大半を雀荘で過ごした。かろうじて卒業して以来、はじめてつく定職だった。

バイクを手に入れてから寝坊しなくなった。夜明けとともに起き出し、仕事の始まる前にスカイラインを走った。タカシの生活はバイクに乗ることを中心に回り始め、日に日に輝きを増していったのだった。

知り尽くしたコーナーをいくつか過ぎたあたりで、タカシは走りのテンションを数段引き上げた。立ち上がりで全開、千切れ飛ぶ路側の風景をヘルメット越しに見ながら、次のコーナーまでぎりぎりブレーキを我慢する。素早く体重を内側に移動しながら、スムーズな旋回にはいる。肩の力が抜けているかチェックし、尻の下の後輪を体重で押しつけながら膝にわずかな力を入力して向きを変えていく。決して焦らず無理しない。その方がしゃかりきになって攻めるよりむしろ速いことを知っているからだ。馬力に任せて立ち上がり、の加速を重視するよりも、車速を落とさないように滑らかなラインをトレースしたあと、低速のトルクを利用してコーナーを繋いだ方

がこのバイクは速い。幸運にも転倒はないが、何度か怖い目にあつて学習した愛車の手なづけ方だった。

乾いた爆発音が規則正しくマフラーから吐き出される。それが自分の鼓動と完全にシンクロし始めている。バイクの上でダンスしているような錯覚に陥る。自然に全身が動く。なんともいえない快感だ。

長いスカイラインがあつという間に終わる。張りつめた神経の緊張を小さな吐息とともに弛め、内海が一望できる展望台の駐車場に乗り入れた。先客の姿を見つけてタカシはヘルメットの中で相好を崩した。赤いドウカテイモンスター400の横に、自分の900SSを停めた。

「おはよう、今日もすぐくい音させてたわね」

コトミが笑うと、ちよつと突き出した白い前歯が覗いた。

「君の方はどうだい？慣らしは終わったんだろう」

「少しは、でもまだまだダメ、乗せられてるって感じ」

コトミが中型自動二輪の免許とバイクを手に入れてから、まだ一ヶ月あまり、夏休みに入ってから早朝のスカイラインで顔を合わせるのが日課になっていた。彼女は高校二年生だった。

同じ赤のドウカテイを初めてのバイクに選んだのは、多分にタカシの影響と思われる。いきなり赤いバイクであらわれた時には心底驚いた。

「ねえ、コーナーの手前でブレーキングとシフトダウンはどちらを先にするの？」

「十分なブレーキングをしてエンジンの回転を合わせながらシフトダウン」

「こうね」

アクセルを握る仕草をしてタカシの教えを仰ぐ。真剣なまなざしでコトミは質問を続けた。

「昨日は高速道路を使って愛媛県まで行ってきたの。怖かったけどスピードを出したんだ。背中に羽が生えたような気がする。どこにでも行ける。最高」

地上すれすれをかすめて飛ぶ鳥になった気分だと言った。

「うん、わかるよ、俺は戦闘機に乗ってる気がするんだ」

大空から急降下して標的を狙うパイロットは首に掛かる加速Gに耐えながら操縦桿にしがみつく。そんな気分だ。

バイクに乗り始めてコトミはズいぶんと変わった。表情が明るくなった。夜出歩くこともしていないという。深夜の繁華街をうろつくより、早朝のスカイラインをバイクで走る方を選んだのだった。

「ツレにも見捨てられちゃってさ」

「補導歴の更新もストツプしたわけだ。」

良かったじゃないかとタカシが言うと、恥ずかしそうに笑った。

「バイクのローンが終わるまでは仕方ないよ。それにガソリン代を稼ぐためにもっとバイトを増やさなきゃあ。」  
ローンが終わっても多分コトミがもとの非行少女に戻ることはないだろうと思った。自由に飛び回る赤い羽根を彼女は手に入れたのだから。

出会ったのは、夜中のコンビニの駐車場だった。誘蛾灯に集まる蛾のように数人の少女がたむろしていた。煙草の吸い殻や安物の香水のにおいに紛れて、コトミも生息していた。タカシはバイクを手に入れたばかりで、ホテルの仕事が終わって夜のスカイラインに試走に出た帰りだった。空腹を埋めるためにおむすびでも買おうと立ち寄った。

バイクをたむろしている連中にいじられやしないかと死角になっている店内に入るのをためらったが、部屋に食い物は米一粒もなかった。ビニール袋を下げて大急ぎで戻ると、少女が一人だけはぐれたように、タカシのバイクのそばに立っていた。背は中くらい茶色の髪の毛は肩より少し長く、下手な化粧のしすぎで顔が異様に白く浮き上がっている。アイシャドウの塗りかたを勘違いしたように目は黒い隈取りが出来ていて、蓮っ葉な立ち居振る舞いの中に背伸びしたあどけなさを感じさせる。

「何か、用か？」

離れた場所でオーロラのような煙を上げている集団に目をやりながら言った。

「なんていうの、このきれいなバイク？」

「ドウカテイ、イタリア人のつくった乗り物だよ」

「すごいね、こんなきれいな形のバイクはじめてみた」

「へえ、君らは頭に出目金を付けた族車仕様の方が専門じゃないのかい」

「そういう子もいるけどね、あたしはちょっと恥ずいかな。ねえ、これ今度いつ走らせるの？」

いつも日の出とともにスカイラインを走っていることを告げると、気のなさそうにふうんと言ったきりバイクを眺めていた。数日して、いつものようにスカイラインの駐車場に出向くと、彼女がいるのに驚いた。

「なにが日の出とともによ。ずいぶん寝坊だわ」

「君は寝ていないのかい？」

膝までのブーツとミニスカート、黒のタンクトップに白いカーデガンを羽織った格好は夜遊びの帰りに立ち寄ったように見えた。

「眠るのがもったいなくはないと思わない？人生限りあるうちに楽しめてね、眠るなんて時間の浪費よ」

何かに焦っているような口調でコトミは言う。

「そんなことない、僕の持論を言うと、眠った時間だけ人生の時間は延長されるんだ。つまり睡眠時間はカウントされることなく、口スタイムとして延長される。だから僕はいつもたっぷりと気持ちよく眠れるだけ眠る」

「けらけらとコトミは笑った。二人は缶コーヒーを買って飲んだ。」

「血のような赤ね、このバイク。本当にきれいだ。あたしにも乗れるかしら？」

「乗れるさ、誰にだって。犬でも猫でも、免許さえ取ればね」  
彼女の瞳が早朝の光を吸収して潤み、きらきら光り輝いた。

コトミは夏休みが始まってすぐ、教習所に通い始め、望みを実現した。奇跡のように自分のバイクを手に入れた。同じイタリアンレツドのドウカテイだった。

彼女はバイクに夢中になった。夜遊びの仲間たちとしだいに縁遠くなっていた。終日バイトに明け暮れ、早朝に起き出してタカシとスカイラインを走った。400ccといえどもけっこうじゃじゃ馬なオートバイをうまく操るための運転技術を、コトミは真剣に追求し学習していった。タカシがいつもインストラクターとして後ろを見守った。何度と同じコーナーを走り、気づいたことをすべてアドバースした。コトミの運動神経は敏捷ですぐに加重のし方や移動のコツをのみ込んでいった。二台の赤いバイクは戯れ合う駿馬のように長いスカイラインをのびのびと走り回った。それは二人にとって本当に楽しい時間だった。

「オートバイに乗るってどうしてこんなに楽しいのかしら。今までなんのために生きてきたのかと違ってしまふ。タカシ君はどう？」  
「暑い、濡れる、危ない、なのにね。こんなに非効率的な乗り物はないよ」

「風が体の中を通るの。瞬時に移り変わる微かなにおいとめまぐるしく移動する光を追っていける。はじめて空を飛ぶ雛のように必死になつて羽ばたいているの」

コトミは自分の心境を語った。タカシには彼女の喜びが理解できる。妹から友人のような関係になり、さらに特別な意味を持つ存在としてお互いを認め合おうと逡巡している。二人は入り口のドアに手を掛けている。

「今からどっか走りに行かない？」

「学校は？」

「夏休みだってば。バイトは店が定休日。タカシ君も仕事休みでしょう？」

「よくご存じで」

「じゃ、決まり。どこか南の方へ行こうよ」

二人はヘルメットを被り、赤い馬に跨る。元気よくコトミが先に飛び出す。その背中に続きながら、タカシはちよつとした違和感を覚える。いつもよりわずかに彼女の仕草が性急なのだ。まあいいや時間は一日たつぷり残っている。まだ車の起き出さない朝のスカイラインを滑り降りて、渋滞の始まる前の市街地を二台は一気に突き抜けていった。

国道を徳島市内に駆け下り、まだ通勤渋滞の始まる直前の県庁前を抜けようとしたとき、異変が起こった。

気持ちよく町並みをすり抜けていく赤い二台のバイクを追跡する闖入者が現れたのだ。どこから出てきたのか、黒いボルシエタ―ポが突然追いついてきた。相手にせずペースを変えずに走っていると、好奇心を露わにして鼻先を押しつけて離れない。996型最新の新タ―ポモデル、400馬力を放つ恐ろしく速い四駆だ。こんな車が徳島なんていう田舎町にそう何台も生息しているはずがない。タカシはドウカテイのよく見えないバックミラー越しにドライバ―の顔を確かめた。南から降り注ぐ太陽の光を遮るために下ろしているのか、バイザーに隠れてサングラスの縁しか見えない。あまり若い男ではなさそうに見えた。薄い唇はねつとりとした爬虫類の皮膚感を想像させ、なんとも嫌な予感がした。

コトミもすぐに異形の敵に気づいた。やり過ぎそうと同じ気持ちだったらしいが、あまりしつこく尻を舐め回してくるのに苛立ち始めたようだった。意味がわからない、というふうにはタカシに首を振った後、スロットルを大きく開けておもむろに加速した。コトミの赤いモンスタ―は弾かれたように飛び出した。

400CCといえども車重の軽いバイクの加速は鋭い。二台は空に舞い上がる鳥のようにポリシエを引き離れた。街角から出てきた何台かのセダンやトラックをシケイン代わりにして一切スピードを弛めずスラロームしていく。しかし、追いつけるものなら来てみる、そんな高揚しかけた気分は一瞬にして、大気を震わせる巨大なエネルギーの固まりに吹き飛ばされる。なんともすさまじい勢いで黒い怪鳥は易々と間隙を詰める。数珠繋ぎの車の間を強引に掻き分けこじ開けてくる。怒った他の車がけたたましいクラクションを投げつける。尋常なハンドルさばきではない。いかれてる、きな臭い狂気がヘルメットの中に漂ってきた。

車に有利な広いバイパスを避け、丈六を抜けて勝浦に至る土手浴いへ飛び込む。二台は阿吽の呼吸で方向指示器も出さずに行方を決める。

速い。コトミのスピードに驚いている。いつの間にこんなに乗り

こなせるようになったのだ。タカシの900SSがついていくのに余裕はない。狭い曲がりくねった山道に入ってからなおさらその俊敏性を増した。ためらうことなく次々と現れるブラインドコーナーに躊躇無く飛び込んでいく。

ポルシェを置き去りにした。ほっとするよりもハイペースでバイクを操縦することに没頭する。高知へ抜ける国道を一気に縫い上り、相生から日和佐へ迂回する県道を選んだ。敵の姿ははるか彼方へ消え去った。国道に出て、大きな寺の佇まいを包み込む日和佐の街の平和にほんのちよっと息をついたあと、二台の赤いグライダーたちは次なるステージの南阿波サンラインへと吸い込まれていく。二輪禁止の看板を軽く無視する。コトミが手を振って道を譲り、タカシが前に出る。思う存分とばせという。

バイク乗りにはたまらない道が続く。右へ左へ無数のコーナーを、大胆なブレーキ、エンジン回転を合わせて素早くシフトダウン、すでに転倒しているかのごとく大きく傾けた車体の内側にさらに体を落とし、スピードを殺さないまま見事な弧を描いて旋回する。ステップとそれに乗せたブーツの爪先が固いアスファルトに擦りつけられて悲鳴をあげる。鋭くクリップングポイントを抉り込み、軽々と車体の重心を起こすとコーナー出口に向かって一気にスロットルを全開した。すうっと前輪の接地する感覚が失せ、跳ね上がるタコメータの針がレッドゾーンに入る直前、瞬時にクラッチを切ってシフトレバーを掻き上げる。加速のもたらす縦Gに首筋を後ろに引きはがされそうになる。血液の濃度がすうっと下がり、視界から路面以外がフェイドアウトしていく。体がシートの上で無意識のダンスを繰り返す。なんとという快感、翼竜の背中に乗って岩肌すれすれをすすめ飛んでいく。

信じられないことにコトミのモンスタ―400がタカシの背後についたまま離れない。二台のドウカティは十キロも続く空の回廊を無心にまろびあう。コーナーは無限に続く。貪るようにどこまでも追いかけていく。二台のリズムが一体化し、二人の呼吸が完全に同調する。すうっと耳の後ろから何かが抜け出していく。生きることにまつわる澱のようなもの、四六時中体を縛り付ける目に見えない錘が熱で溶けて背後へ飛び去っていく。だからバイクに乗る。ただ気持ちよければそれでいい。ガードレールの向こう側は目も眩む絶壁だ。遥か下の岩肌に波が打ち寄せて白い泡と消える。ひとつのミステで人生のすべてが終わるだろう。それでもスピードを緩めることはない。かまわずスロットルを開けていく。タイヤのグリップが限界を超え、車体が横滑りを始める。絶妙のバランス感覚で車体のヨ―をコントロールし、固いアスファルトに黒いゴムの跡を残しながら加速していく。その様はさながらカタパルトから海に向けて飛び

出す矢のように見えた。

空気を切り裂いて、快感を追い求めるきちがいじみた行為に没頭している。背中で何かが急ぎ立てる。ずっと前からタカシを見つめている者がいる。その意志はタカシを苛立たせ、意味のない無謀な行動に駆り立てる。破壊衝動とその裏返し、自滅願望が体中に渦巻いている。死の瞬間、さぞかし脳にホルヒネの充満した極楽の境地だろうと想像する。足元に潜む魔に絡め取られそうになる。はっとして我に返り、上がりすぎたペースを落とす。さすがに背後のコトミの姿は見えない。背を伸ばし、後ろを振り返った。彼女はすぐに追いついてきた。

エアポケットみたいな駐車場に下りた。ほっと息をつく。生い茂った路傍の雑木の枝には、野生の猿が興味なさそうにぶら下がっているのを、タカシは古い映画のシーンを切り取ったように網膜の片隅に捉えた。バイクでここに来たときには、タカシは何かの因縁のようにたびたび猿を見かけた。敵を振り切った二人はしばしの休息をとることに決めた。

「うわあ、猿だよ、猿がいる」

ヘルメットを脱ぐなりコトミが叫んだ。灌木の間をのそのそと歩く猿の親子が見えた。赤い顔と尻が茂みの合間で揺れている。小走りに近づくとあっという間に消え去った。顔を上げると太平洋が眼下に広がっている。茫洋とした水平線の上には、玩具のような船が浮かんでいる。夏のぼやけた空気の下に荒い大海原が太陽の陽差しを反射させて輝いている。息を呑んでそれを見つめていた。

「海と猿。いいもんだろう。なかなかお目にかかれないよ」

「ほんとうにきれい。ねえ、タカシ君、あたし決めた。もう家には帰らない。このままどこまでもバイクで旅を続けるわ。一緒に行かない？」

なるほどと思った。コトミの雰囲気がいっもと違った理由がわかった。彼女は何かに踏み切りを付けたのだ。彼女の内側でくすぶっていたものに見切りを付け、自ら解放されようとしている。いきなり進化した彼女の走りと、急に深みを増した瞳がそれを証明している。タカシは黙って微笑んでいる。

「大阪に行く」

コトミははつきりと言った。そこに何かがあるのかは話さない。多分彼女に必要な何かを見つけたのだろう。

「タカシ君も一緒に行かない。」

「ずいぶん急な話だな」

「とりあえず行ってみる。それから考える。ねえ、行こうよ」

旅行にでも行くような口調で言うが、本気であることをタカシは知っている。彼女はいつもこうなのだ。



「行きたいね」  
本気でそう思う。そうしてみたいとタカシも思う。糞みたいなホテルの仕事を投げ捨て、新しい街でコトミと一緒に新しい生活、何をやっただって食い扶持くらいは稼げる。それに大阪は庭みたいなものだ。もともとタカシの胸の中にある放浪への希求がむくむくと目覚め始める。それは大きくなる一方だった。

再びヘルメットを被り、走り出そうとエンジンを始動したバイクに跨ったと同時に、そいつはまたやってきた。いくつか下のコーナーをすさまじいスピードで駆け上がってくる黒い塊が見えた。山肌から湧き出た禍々しい地霊のように見える。

「来たぞ」  
大声で叫び、駐車場を飛び出した。素早くコトミも続いた。体の勘が戻るのに時間がかかる。焦るほどにバランスを崩し、コーナーから飛び出しそうになる。ついにバックミラーの中に、ポルシェターボの黒い車体が顕れた。センターラインを大きくはみ出しながら、怒濤の勢いで追いついてくる。言いしれぬ恐怖を感じる。コトミも同様だろう。竦んだ肩に不自然な力が入って乗車姿勢を壊している。車速が上がらないのはそのせいだ。追いつかれることを覚悟したとき、別のやつが現れた。

白黒に塗り分けられたカロラーのパトカーが、間抜けなタイミングでタカシたちとポルシェの間に割って入ったのだ。驚いたポルシェが急ブレーキを踏むのがわかった。このスカイラインは二輪車通行止めになって久しいが、時々パトカーが待ち伏せして峠の走り屋たちを取り締まる。事件のない田舎警察では、よほど暇を持てあましているのだろう。車載のマイクが寝惚けた声を出した。

「あー、そのバイク止まりなさい。路側へ寄って停止しなさい」ヘルメットの中で笑ったのはタカシだけではあるまい。コトミはすぐさまスロットルをワイドオープンしてダッシュした。コーナーを三つ四つこなすと、カロラーの白黒パンダは消えて無くなった。ナンバーを控える間も与えたはずがなかった。拡声器から出る嘎れた声をためらいなく置き去りにする。

さすがにポルシェターボは続いてこなかった。地獄から這い出た怪物のように見えて、たかがパトカーに遠慮する程度のヤツだったのだ。間抜けなパトカーの中では制服の巡査が顔色を変えて怒り出して、間抜けなバイクの足の速さは野生のチーターだ。一気にスカイラインを走りきり、国道に戻らず海岸線の裏道を大きく迂回して室戸岬へ向かう。すぐ足元に打ち寄せる波が白く砕ける。無心に走る。二台の赤いドウカテイはコマネズミのように狭い小道を縫っ

て走り続けた。

道の分かれ目に来て、コトミがバイクを止め後ろを振り返った。小さな漁港の集会所の前には掲示板があつて、ガラスケースになつたその中には地元の小学生在が習字の時間にも書いたのか「世界平和」の文字が並んでいる。なんだか愉快な気分にも包まれている。一息ついたかったが、コトミはまだ走り足りないらしい。すぐさま駆け出す気配のまま、真っ直ぐな視線でタカシを見つめている。左に行け、と合図を送る。

崖っぷちを駆け抜けて曲がりくねったブラインドコーナーへ飛び込んでいく。飛び石をリズムよく渡る遊びに似ている。エンジンの振動が心臓の鼓動と混ざり合い、体が自然に躍動する。血の中に放出されたカテコールアミンが堰を切って脳に押し寄せる。飢えたオカミのようにカーブを貪る赤いドウカテイはまさに血の色をしている。うなじの後ろで、走れ飛ばせと何かが囁く。その声の虜となつてアクセルを開け続けた。

海が広がっている。波打ち際を軽やかに走り続けると、いつの間にかぽっかりと空気の穏やかな国道に戻つた。引き続き岬へと向かう。太陽が輝きをさらに増している。風を浴びていても、焼け焦げそうな熱が全身を襲い、息苦しさが増す。夏の太陽は真っ盛りで、タカシたちを焼き尽くそうと頭上から照りつけてくる。風を自ら起こし我が身を冷やそうと喘ぐ。熱風の中を切り裂いて進んでいく。

海岸線を漁港を横に見ながら駆け抜けた。あつという間に、室戸岬まであと30キロの表示が現れる。海岸線を切り取って広大な海を眺めながら走る。海から吹き付ける風が急に強くなり、黒い岩に砕け散る波の白さが強いコントラストとなって目に映り込む。前を行くコトミの背中を見つめている。タカシは彼女の中に芽生えた決意を自分の中に移そうとしている。自分に気づく。リゾートホテルでの仕事をこなす日々の垢が、汗と一緒に皮膚に浮き出している。ドウカテイというバイクを手に入れてからますます不毛の時間となつていった。

ホテルマンとして宿泊客にサービスを尽くす仕事に意義を見つけないようとした。最初それは十分に可能な気がした。はじめて就くまともな仕事だった。他の従業員の間に蔓延する怠惰でおおざっぱな空気に一人抗い、客室係からプールの掃除まで何でもやった。体を動かしただけ客の笑顔を得られると信じ、実際それを感じることもできた。徐々に喜びを見いだしつつあつた。

ある時、突然世の中の空気が一変した。景気の失速、バブルの崩壊、株価の暴落といった言葉がテレビの画面に踊る。みるみるホテ

ルからは予約が減り、すべてが閑散としてきた。タカシには関係のない話のはずだった。

しかし、事件は起こった。たまたまタカシが当直のフロントに入った晩だった。時計が日代わりを告げると、先輩のフロントマンのKは早々に仮眠室に入った。一時を回ったとき、客室からのけたたましい電話が鳴った。嘎れた男の声が、ぶうんという異様な雑音とともに耳に飛び込んできた。

「ルームサービスで赤ワインを頼む。ボルドー産の出来るだけ濃厚なヤツがいい。あるか？今すぐにだ」

巨大な蠅が飛ぶような振動音が鼓膜に執拗にまとわりついてきた。タカシは嫌な予感に苛まれながら、部屋番を聞き折り返し電話することを伝えて、高いびきのKを叩き起こした。彼は眠そうな目を擦りながらほとんど寝言に近い声でワインの有り場所を伝えた。

「ピシヨラランド94年、エロ呆けの親父にはもったいないけど他に出る機会もないだろう。在庫整理にちょうどいいや。高いぜ、そう言うっておけ。若いホステス連れていい気なモンだぜ」

彼らがチェックインしたときにも、Kはやっかみのこもった舌打ちを何度もしたのだった。小太りの中年男が連れていたのは、見栄えのする若い女だった。うつむきがちに男の後ろを付いて歩く姿は、花の艶やかさを押し隠し恥じているような趣があった。くびれた腰、細い足首、茶の混ざらない漆黒の長い髪、Kの言うような安い女には見えなかった。羨望を集めるのに十分な容姿であった。

タカシはワゴンを引いて部屋の前に立った。ノックすると、人間のものとは思えないひび割れた声がして重い足音が近づいてきた。なぜだか逃げ出したい衝動に駆られた。深夜の空気がどんよりと足元に沼地の泥のように絡みついてくる。

「あったか？」

待ちかねた男の顔は、ぎらぎらと脂ぎっている。ドブのような口臭が吐きかけられる。顔を背けながらワゴンを押し出すと、白いバスローブ姿の男はタカシが部屋に入るのを手で制して、これでいいとコルク抜きを手を取った。

「自分でやるよ。ありがとう」

鼻先でドアがどたと閉まった。漆黒の髪をした女の姿は目にすることが出来なかった。二時間後に再び死に神が電話のベルを鳴らした。受話器の奥から届く嘎れた声はこの世のものとは思えなかった。それは何かを訴えながら地の底に引きずり込まれるように遠ざかる。Kを叩き起こしてエレベータに飛び乗った。部屋のドアを開けたとき、なんと甘いにおいが立ち込めていた。タカシが運んだボルドー産の赤ワインの芳香、それに混ざった異臭が女の血であることは明白だった。白い皮のソファにうずくまる女の素足にはべっ

とりとどす黒い血が塗られている。首を切られている。あるいは吐瀉物かもしれない。立ち上るあまいにおいは血によるものだった。男の姿が見えない。ベランダへの窓が大きく開いて、レースのカーテンが闇から吹く風に大きくはためいている。ベランダに出たKが呻いた。遙か下の車寄せに、潰れたカエルのような姿の男を見たとき、Kは憚り無く音をたててびしゃびしゃと嘔吐した。さすがに死んだ男の背中に吐きかけるのを避けて、ベランダの隅を汚した。男は女に毒を飲ませて死に追いやった後、ベランダから飛び降りて自らの命を絶った。青酸化合物を混ぜたワインは、その芳醇な風味の裏に毒の味を隠し、女の喉を通過し消化管を灼き尽くした。おまけに首まで果物ナイフで切り裂いた。

大勢の警察官がやってきて大騒ぎになった。数日の間タカシは犯人扱いで、同じことを何度も尋問された。ワインを運んだ時、男と何かトラブルとなったのかと疑われているらしかった。三十分も帰ってこなかったとKが不必要な証言したからだ。控え室で寝ていたはずのKが、自分の職務怠慢を隠すために荒唐無稽な言い訳を思いついたのかもしれないなかった。すべてのことを嫌疑の色眼鏡で見ないと気が済まない人たちの輪の中に急に放り込まれ、タカシは今にも自分が犯人であると自白し始めるのではないかと恐ろしくなった。

薄暗い取調室の空気はタカシの精神を圧迫し続け、妄想を産んだ。美しいあの女を手に入れるために禿頭の男をバルコニーへ追い立てて投げ落とす。熟れたトマトが破裂するようにいとも簡単に汚物と化した男の姿を見下ろしその背中に唾を吐く。部屋へとって返し、恐怖におののく女を犯す。女は無表情を装いながらも、若い肉体が発する淫蕩さに負けてしだいに溶け始める。タカシは女の尻を抱え上げ、一心に屹立した自分のペニスを柔らかい肉の塊の隙間に打ちつける。単調に果てしなく腰を振り続ける。どうしようもなくふぬけた顔をした自分が見える。いったい誰なのかと、鏡の中の犬そっくりの生き物に問いかける。おまえはいったい自分が何様だと思っていた。濃い煙草の煙を目の中に吐きかけてきた。刑事が知りたくてしようがない情景が脳裏に浮かぶ。テーブルの上の果物ナイフで薄いゴムのような首筋を、後ろから一気に切り裂くときの感触がまだ手に残っているような気さえする。女を殺す瞬間、タカシはふやけた腔の中へだらだらと際限なく射精する。まさに死を迎えつつある女の性器はそこだけ充血を止めない別の生き物のように思える。まだ萎える気配のないペニスを引き抜き、始末をすませて何食わぬ顔で部屋を出る。血のにおいがむせ返る。そんな妄想が頭の中を占領している。警察のカビ臭い空気が肺の中に満ちて、荒唐無稽な想像を掻き立てる。不思議な体験だった。

時間がたちホテルの仕事に戻ったが、タカシはしばらくの間、日常の感覚を取り戻すことが出来なかった。胸の中に澱のようなものが代謝されずに残った。眠りが浅くなり、嫌な寝汗をかく夜が続いた。なんのために生きているのかわからなくなった。自分が何者でどこへ行こうとしているのかを見失ってしまった。ただだからと時間を浪費していた頃に逆戻りしていた。どこまでも墜ちていくのを救ってくれたのは、たまたま見つけたイタリア製の赤いバイクだった。

室戸岬へ向かう海沿いの道は、大小のカーブの連続だった。奇岩といわれる真つ黒い岩に激しい波がぶつかり砕け散る。海面を渡る強い横風が吹き付けてくる。ハンドルを取られ、コーナリングのバランスを崩してドキツとする。コトミの背中はいかかわらず、強い走りの意志に満ちている。大気のを突き破ってどこまでも真つ直ぐに進んでいく。タカシはヘルメットのシールド越しに抑えきれない笑い声を上げた。胸の中の自由がむくむくと広がっていく。コトミの背中を見つめているうちに、彼女の持つ強さが伝染してきた。鋼のように強い意志がそこにある。何者にも侵されぬ強靱な抵抗力はあきらかに彼女のDNAから発せられるものだ。頭を押さえつけようとする敵にけっして屈することはない。それがさらにドウカテイという赤い羽根を手に入れて精一杯の飛翔を試みようとしている。

室戸岬に達すると海からの風がさらに勢いを増した。海の遙か彼方をゆっくりと進む台風のせいかもしれない。昨夜の天気予報を思い出した。向かう先の空も鈍色に曇り始めている。岬を通過して室戸スカイラインへと駆け上る。ぐるぐると急勾配の道を上っていく。眼下には海と畑の緑が鮮やかな色合いで広がっている。ビニールハウスがきらきらとガラスの破片をばらまいたように瞬いている。

またしてもそれは現れた。カラスの黒装束を纏ったポルシェの姿が見えた。異形の出で立ちには、今まさに地の中から這い出た毒虫のように見えた。ぎよっとコトミが体をこわばらせるのが見て取れた。タカシとて同じ心境だった。うんざりすると同時に強い怒りが湧き起こった。コトミが振り返って肩越しにやれやれと首を振った。そして前に向き直ると同時にアクセルを大きく開けた。威勢のいいエンジン音をたてて加速する。ガソリンタンクに上体を伏せて上目遣いにコーナりの入り口だけを見据える。短いスカイラインがあつという間に終わり、下りのカーブをこなし市街地に戻り、高知市内を指す。午後の国道は一般の車で混み合っている。二台のバイクは、その隙間を縫って方向指示器もつけずにテンポ良く進む。追跡

してくるポルシェを巻くにはかえって好都合だ。

信号待ちして後ろを振り返ったとき、まさかと思う光景を眼にした。黒い土の塊のようなポルシェターボが、センターラインを大きくはみ出しながら進んでくる。他の車をゴミ箱を蹴り飛ばすように追いたて、無理矢理進路をこじ開けて迫ってきた。クレイジーだ、タカシはヘルメットの中で叫んだ。背筋が寒くなった。なんなんだ、あいつはいったい。なんの目的で追っかけてくるのだ、何をしようとしているのか、どの誰なのだ、フロントグラス越しに顔を窺うがはつきりしない。立ち止まって向かい合い、睨み据えることも可能だが、なぜだかそうしたくない。コトミも同じ気持ちなのだろう。逃げるスピードを上げる、それ以外考えない。むざむざと白旗を揚げて立ち止まりたくない、そもそも狂気に溢れたあの怪物がただですませるわけではない。あいつならタカシたちの命を奪うところまでやるかもしれない。バイクもろとも跳ね飛ばし、何食わぬ顔をして悠々と去っていく。ひび割れた笑い声を残しながら地獄へと帰っていくのだ。

タカシたちは赤い羽根の性能を一杯に使って逃げ続ける。恐怖に金縛りになりそうだ。コトミのバイクにややもすると遅れそうになる。肩の力を抜け、と自分に言い聞かせバイクの運転に集中する。ハンドルが入るわずかな隙間をこじ開け、車の間をすり抜けしていく。道路の混雑は市街地になってさらに増している。縦横無尽にスペースを掘り当てて進んでいく。二台は見えないロープで結ばれたみたいにびったりと離れることはない。それでもポルシェターボはぐいぐいと近づいてくる。激しくパッシングし、エンジンを吹かし、吠え声を発しながら追い上げてきた。

バスの脇をすり抜けたとき、一瞬凍りついた。路側に止まっていた白バイと出くわした。黒いサングラスの機動隊員と、お互いにぎよっとして顔を見合わせた。慌てて逃げ出す。手にしていた無線を放り出すように仕舞い、白バイも急発進した。そこへ黒いポルシェターボが鉢合わせした。避けきれなかった。がしゃんという大きな音がして、白いバイクが腹を見せて転がり、地面と接触して火花をあげた。赤いサイレンが碎けて散らばった。バイクの横を滑る隊員の姿が見えた。すぐに起きあがるのが確認できた。ポルシェのバンパーの隅がへこんでいる。所在なげに車を止めたが、ドライバーは下りてこようとしめない。しめたと思った。この後、どうなるうが知ったことではなかった。

タカシたちはかまわず逃走した。なんとも幸運なタイミングだった。ヘルメットの中で吹き出した。こんなに馬鹿げた出来事は今までになかった。腹の底から笑うなんて何年ぶりだろう。笑いをこらえる必要もなかった。笑いたいだけ笑った。コトミの背中もおかし

さに震えていた。二人は再び、地面すれすれを滑走するツバメのようにバイクを走らせ始めた。

高知市街に向かわず、南国インターで高速道路に入ろうとしたとき、急に頭上を覆い始めた黒い雲からぽたぽたと温い雨が落ちてきた。誰かの小便のような不快な雨だった。料金所をくぐるのをためらったが、ままと走り出す。高速道路は一般道とは違ってかわつて空いていて、タカシたちはカタパルトから弾かれた砲弾のように一気に加速した。

雨はしだいに強くなった。ヘルメットを打つ雨滴は風圧で吹き飛び、無数の針のように体に突き刺さった。みるみる皮膚から熱を奪っていく。皮のジャケットが水を含みじつとりと重さを増す。体を伏せて小さくし、すべてを吹き飛ばすようにアクセルをひねる。コトミの前に出る。スピードメーターの針がはね上がる。時速二百キロに近くなると、視界からは余分なものが消えていき、脳の奥底で虫の羽音が振動する。トンネルに入るたび、色彩が一変する。少し離れたコトミを待つ。すぐさま追いついてくる。カウルを持たない400CCのネイキッドバイクにしては驚異的なスピードだ。タンクに張り付くようにして前だけを見据えている姿が、バックミラーに映る。どこまでも走り続ける力を、彼女は持っている。何者にも囚われる必要はないと、体中で訴えている。そして今、その逞しさをタカシは共有している。自分を縛るものは自分自身だ。自らの呪縛をとぎ、解き放たれた野獣のように駆けていく。

繰り返し長いトンネルを越える。川之江のジャンクションでタカシはコトミを先行させた。なんのためらいもなく彼女は高松道を選ぶ。瀬戸大橋を渡って本州へ向かうつもりだ。彼女はもう家には帰らないと言った。これまでの生活すべてにけりをつけ、新しい街で新しい生活を始めるつもりだ。頼れる友人でもいるのかもしれない。コトミのことについてタカシはほとんど何も知らない。

高松道は広い二車線の高速セクションで、二台は思い切りアクセルを開けた。雨もすっかり止んで、前を遮るものは何もないはずだった。

何者かが迫り来る気配を感じた。バックミラーの片隅にきらりと光るものが写った。星の瞬きのようなわずかなサインを見逃さなかった。心臓が鼓動を早める。もうわかっていた。そいつから逃れるすべはなかった。黒いポルシェターボが空気を震わせながら迫り来る気配を感じている。再び車体に張り付き、最高速を出そうと試みる。分厚い空気の壁に押し戻され、息のできない金魚のように喘ぐ。もうダメだ、追いつかれる、巨大な鮫に呑み込まれる光景が瞼の裏

側を赤く染める。バサバサというエンジン音が背後に迫る。追突するつもりか、幅寄せしてコースからはじき出そうとするのか、もう手が届く位置まで近づいてきた。車速は時速二百キロに近い。強い横風に振られる。真夏の猛暑にあぶられた路面のアスファルトは柔らかく溶け、トラックの残した轍でうねっている。ハンドルを抑えているのがやっとな有様だ。

背後に迫った。ドライバーの息吹さえ感じられる。ターボエンジンの生み出す無限のパワーが覆い被さってくる。ゆっくりとポルシエは追い越し車線に出て、一気にアクセルを床まで踏みつけた。熱の塊がタカシのドウカテイの横をスローモーションで過ぎ去っていく。やっとの思いで運転席を垣間見た。ドライバーの顔が見たかったが、夏の轍が邪魔をした。ほんのわずかに見えた薄い唇はほんのわずかに微笑んでいるように見えた。ぐいぐいとポルシエはさらに加速した。車間があつという間に開いていく。するすると遠ざかる。そのとき、ドライバーが軽く手を挙げて合図するのが見えた。それで終わりだった。タカシはすべての戦意を喪失放棄した。完全なる敗北、超馬鹿げた遊びにも幕引きが訪れる。緊張の糸を解き、スロットルを弛めた。両肩を押さえつけていた空気の抵抗が一気に抜け落ち、呆けた抜け殻がバイクの背中にとまっている。

次の瞬間、赤い稲妻が追い越していった。コトミのドウカテイだった。彼女はまったく諦めていなかった、ポルシエに屈するつもりなど毛頭無い。フルスロットルで走り続けて来たのだ。タカシを追い越し、さらにポルシエにいどみ続ける。その背中を見送り応援する。おまえはそのままどこまでも行けと思う。幸運に守られながら行ける所まで止まらずに進め。幸運を祈る。強い生命力を発揮し続ける、背中に向かつて叫んだ。タカシは自分の居場所は自分で探さなければならぬことを今さらのようにやっとな理解する。日が傾き、やっとな長く暑い夏の一日が終わりの時間を告げている。

黒いポルシエは遙か先に消え去ってしまえば、坂出ジャンクションが来た。コトミは迷わず、瀬戸大橋に向かう。タカシは徳島へ戻る車線を動かさず、二人は並んでバイクの上で向き合う。じゃあ、と手を挙げて軽く合図する。お互いに深く大きな想いをのみ込み、別れの挨拶を交わした。コトミのドウカテイが向かう先には大きなオレンジ色の太陽が待ち受けていた。

了